

## 優秀賞

### 復興

寝屋川市立第六中学校 二年 小城こじょう 秀斗しゅうと

「ハッピーバースデートゥーユー。」

僕の家族の誕生日の祝い方は、まずケーキにろうそくを立て、ろうそくに火をつけて部屋の電気を消して歌を歌って誕生日の人がろうそくの火を吹き消すという流れだ。どこの家も同じだろう。

二〇一一年三月一三日、僕の妹は四歳の誕生日を迎えた。東日本大震災の二日後だ。いつものようにろうそくに火をつけ、電気を消した。歌を歌い始めたその時、妹が大声で泣き出した。驚いて電気をつけて訳を聞いてみた。地震の時の事を思い出していたらしい。

僕の家族は、東日本大震災が発生した時茨城県に住んでいた。その日の夜は停電で真っ暗な中、数えきれないほどの予震が続き、なかなか眠ることができなかった。妹には、その夜の事が頭に焼きついていたので。

僕はその時、小学三年生。僕にとって忘れられない事は、幼い時から友達と一緒に遊んでいた公園に看板がたてられたことだ。その看板には「高濃度の放射線が検出されました。立ち入り禁止」と書かれていた。その他にも小学校のグラウンドの土の表面を削って、黒いビニール袋に入れ、それをグラウンドのすみに置きっぱなしにしていたことや、父がガイガーカウンターを買ってそれを持って家の庭に行くと「ピーピー」鳴り続けていたことがあった。僕の身の周りにある放射能は、福島第一原子力発電所から飛んできたものだ。

事故が発生する前までは、広い公園でのびのびと自由にサッカーをしたり、木登りをしたりして遊んでいたが、事故後は外で遊べなくなった。僕は自分にとって楽しめる場所を奪われてしまった。

あれから五年が経ち、中学二年生になった。僕は今大阪に住んでいる。学校のグラウンドでのびのび鬼ごっこをしたり、放課後は部活のバレーボールをしている。最初は遊べることにありがたみを感じていたが、最近では

それが当たり前のようになった。

福島の避難区域の子どもはどうしているだろう。住みなれない仮設住宅での生活や、避難生活を送っていて家に帰れず、泥棒に家を荒らされ、遊ぶこともできず、避難先での生活に慣れないまま暮らしている人がたくさんいるだろう。僕のように他の学校に転校している子も多いに違いない。

僕は福島から来たというだけで「放射能」と言われいじめられた子の話を聞いたことがある。僕はいじめた人に言いたい。「どんな思いで転校してきたか考えろ。」と。

東日本大震災では多くの人の権利が奪われた。地震に加えて津波や原発の事故が発生し、人々の心と町を傷つけていったからだ。その心の傷は新しく家を建てたとしても癒えることはない。

四歳だった妹はもう小学四年生。誕生日では電気を消して歌を歌い誕生日の人が火を吹き消すということができるようになった。

インターネットで「東日本大震災、子供」と検索してみた。すると「震災があったから夢をあきらめた」とのっけていた。僕はそんなにすぐに夢をあきらめないでほしいと思った。なぜなら、たくさん辛い思いや悔しい思いをしてきたのだからあきらめずに前に進んでほしいと思うからだ。

復興とは、新しい建物ができて町が元の姿に戻っていくだけではなく、人々の傷ついた心をケアしなければ、復興とは言えない。